

苦手意識がある児童が楽しんで書くことができる授業の手立て

—伝えたいことを文章にする過程のサポートを通して—

M15EP008

清水 ゆき菜

1. 問題

(1) 書くことの実態について

近年、様々な調査で書くことの実態に関することが明らかになっている。特定の課題に関する調査(2006)では、小学校第4学年から中学校第3学年の児童生徒に意識調査をしたところ、書くことが好きではないと思っている児童生徒が多くいる現状が明らかになった。また大学国語教育学会の調査(2007)では、「みんなの前で発表してもいいですか」という話すことに関する項目、「本を読むことは好きですか」という読むことに関する項目に比べて、「作文を書くことは好きですか」という書くことに関する項目は、年齢が上がるにつれて好きではなくなってしまう傾向があるということが分かった。

(2) 書くことが好きでなくなる理由

書くことが好きでなくなってしまう理由として、児童の発達と、書くことがもつ特徴が挙げられる。

子安(2011)は、児童は年齢と共に、徐々に客観的、論理的な思考力が発達し、自己理解も他者との客観的な比較が可能になってくるとしている。そのような発達により児童が劣等感を感じるようになり、それが書くことへの苦手意識に繋がるのではないかと考える。

また、海保(2007)は、書くことがもつ特徴を理由として挙げている。思ったことは一つでも表現の仕方は一つではない。その逆も言える。そして、書く際には様々な守るべきリテラシーがあり、そのリテラシーの制約を受け自分の思いを伝えられない。このような思いと表現のギャップを理由の一つとして挙げている。

(3) 説明文の難しさ

では、書くことの中でも特に難しいことは何だろうか。書くことの中でも、特に難しいのは説明文だと考える。それは生活作文や感想文などと違い、実際に体験したことや自分が思ったことで書くことができないからである。書くためには、書く材料が必要である。その材料が、自分が体験したことや思ったことではなく、事実であるため、難しいのだと考える。また、平山(2002)はヴィゴツキーの理論を基に、書き言葉は話し言葉よりも抽象的であるということを書く難しさの一つとして挙げている。抽象的であるから難しいのであるので、より抽象的な内容、言葉である説明文が難しいのはここからも分かる。そして、説明文には文章構成など様々な決まりごとがある。その決まりも難しさの理由の一つとなっていると考える。このように、説明文は作文の中でも児童にとって難しく、ハードルが高いものなのだ。

そこで本研究では、説明文に焦点を当て、書くことに苦手意識のある児童の苦手意識を少しでも緩和し、楽しんで書ける体験をさせる授業の手立てを考えることとする。

本研究でいう「楽しんで書く」とは、題材に興味をもち、書くことに抵抗感を感じずに書こうという意欲をもつことができることである。また、「伝えたいことを文章にする過程」とは、書きたいことを発想し、それを記述、構成するまでの過程とする。

2. 方法

(1) 対象校 山梨県内の公立小学校

(2) 期間 2016年6月～12月(週1回)

(3) 児童 第3学年児童(26名)

(4)実施方法

①**参与観察**：参与観察を通して、児童の実態、効果的な授業の手立てを明らかにする。

②**アンケート**：授業実践に関わる、書くことへの意識調査を9月に行い、対象児童の書くことに関する実態を把握する。

③**授業実践**：①②を踏まえて具体的な方法を考え、授業実践を行う。実践後意欲面と技術面について、フィールドメモ、学習感想、ワークシート、作文から検討する。

3. 結果と考察

(1)児童の書くことに関する実態

3年生児童24人に対し、9月に説明文を書くことに関するアンケートを行った。質問項目は以下に示す。

質問1：何かについて説明する作文を書くことは好きですか？
質問2：その理由はなんですか？
質問3：書く時に困ったことはなんですか？

表1 質問1結果

項目	人数 (/24)
好き	8人
少し好き	8人
少しきらい	5人
きらい	3人

質問1の結果は表1の通りである。アンケートの結果と観察の実態を照らし合わせてみると、作文が書ける書けないと作文の好き嫌いは同じではないということが分かった。

質問2で、その理由を問うと、好きな理由として1番多かった理由は、「調べることで気づいたり分かったりして楽しい」ということだった。次に「誰かに伝えること教えることが楽しい」だった。この二つの理由が理由のほとんどを占めた。一方、「すらすら書ける」「すぐに書くことを思いつく」「字を書くことが好き」など書くことに関する理由もいくつか挙がった。この理由は、書く能力や技術に関係していることだ。やはり、書くことができるという能力や技術も大切だということがわかる。しかし、書く能力や技術に関する理

由は、調べること伝えることに関する理由に比べて少ない。児童にとって説明する作文は、調べることや伝えることが主であり、書くことは文章にするという手段なのだと分かった。

嫌いな理由は「これでいいのかと思うから」「うまく書けないから」「字を間違えるから」「思いつかないから」に大きく分けることができた。ほとんどが書く技術に関する理由である。しかし、中には「書こうとしても本当に書いていいのか悪いのかわからない。」「文章などの書き方が本当にこれでいいのかなと思うから。」といった自信のなさが理由となっている児童もおり、書く能力や技術への手立てと同時に、自信のなさへの心理的な手立ても必要であることが分かった。

(2)授業実践の計画と手立て

本実践では、書くことへの苦手意識の緩和、意欲の向上を目標としている。そこでこれらを達成するために、観察やアンケートを通して分かった児童の実態を踏まえ、①書きたいという思いを引き出す手立て②書けるようにする手立て③書いてよかったという思いを引き出す手立ての3点を意識することとした。そしてさらに、それぞれの具体的な手立てを児童の実態を基に考え、単元計画を行った。

表2「食べ物のひみつを教えます」(光村3年下)

時	ねらい及び学習活動	指導上の留意点
1	○学習の見通しをもつ。 ・米を例に、どんな食品になるかや、その作り方を考え、実際に資料を活用して調べる。 ・調べたことがどのような文章になるのかを教科書で確認する。	・今後行う調べる活動を実際にグループでやってみることで、どのような活動をするのかや、調べ方をつかみ、単元の見通しをもつことができるようにする。
2	○説明文の書き方(ワザ)を考える。 ・説明文の構成やどのよ	○活動を通して、段落や接続詞への意識を高めるとともに、

	うなことを書けばいいかを確認する。 ・第1時で調べた食品をおいしく食べる工夫ごとにグループにすることで、段落意識をもつ。 ・作文を書くとしたら、それぞれのおいしく食べる工夫をどの順序で書けばいいかを考える。	書く時には読み手の立場で分かりやすい文章を考えてみることを大切だということを伝える。
3	○どんなことを調べればよいか考え、調べる。 ・選んだ食材についてマップ図を書き、そこからどんなことを知りたいかを考える。	・それぞれの活動を、米を例に全体で確認してから活動し、活動を全員が理解できるようにする。
4 5	○調べたことを表にまとめる。 ・「できる食品」「作り方」「おいしく食べる工夫」を資料から見つけワークシートにまとめる。	・どの本にどの食材のことが載っているのか分かるよう、表紙に付箋で書いておく。 ・分からない言葉は辞書を使って調べ、分かる言葉でまとめるように伝える。 ・それでも分からないような言葉は、簡単な言葉に直した表を黒板に掲示する。
6	○調べたことをつかって「中」の文章を書く。 ・調べたことをどの順序で書けばいいかを考える。 ・「中」の文章の書き方に注意して書く。	・具体的にどういう文章を書けばいいかを示すため、教科書や教師作成のモデル文を提示する。 ・ワークシート1枚に1つの工夫を書かせ、まとまりを意識できるようにする。
7	○「はじめ」「中」「終わ	・どのように書けば

	り」の文章を書き、清書する。 ・「はじめ」「終わり」の文章を書く。 ・推敲する。 ・清書する。	いいかをモデル文を示して確認する。 ・推敲では、今まで学んだ説明文の書き方や工夫ができていくかに注目させる。
8	○発表し、評価し合う。 ・自分の書いた説明文をグループで発表する。 ・自己評価を行う。 ・友達の発表を聞いて、良かったところとアドバイスを書く。	・評価するポイントを第2時で出した意見を基に作成して提示しておく。

①書きたいという思いを引き出す手立て

児童が作文を書きたいと思うためには、調べたい、伝えたいと単元全体に興味をもつことが重要だ。つまり、児童が活動に意欲をもつことができるよう、目的意識や相手意識を児童自身をもつことが大切ということだ。そこで、本研究では一人一人が博士になって、調べたことを他学年である6年生に伝えるということを目標とし、全員で確認をした。博士という言葉を用いたのは、小学校3年生にとってこのような言葉は特別感があり、意欲を高めるために有効だと観察を通して分かったからだ。伝える相手を6年生にしたのは、普段関わっているクラスの友達ではなく、他学年で上級生の6年生に伝えるとすることで、より相手を意識できると考えたからだ。

また、児童が作文を書きたいと思えるためには、活動を理解できることも重要だ。何をするのが分からなければ、意欲をもつことは難しいし、さらには難しさを感じ苦手意識を高めてしまう可能性がある。そのため、本研究では、メインの活動に入る前に、第1時、第2時で活動のやり方をおさえ、見通しをもたせることを重視した。

②書けるようにする手立て

アンケートより、児童は作文を書く際、発

想、記述、構成の各段階において困っていることがあることが分かった。本単元は、説明文の単元なので、その中でも、調べたこと（伝えたいこと）を文章にする過程をサポートすることとした。そのために、書く前に説明文の書き方を学ぶ時間をとったり、各段階をワークシートを使いスモールステップで進めて行ったりするようにした。また、調べる活動を行うと、どうしても資料の言葉を書き写してしまうことがある。書き写すだけでなく、読んだ人が分かるような言葉で書き直すことができるように、分からない言葉を調べる活動を行うことにした。

③書いてよかったという思いを引きだす手立て

アンケートより、書くことへの自信のなさが書くことが嫌いに理由につながっている児童もいた。そこで、本研究では心理的な手立てとして、様々な段階で、児童の頑張りを評価することにした。単元の途中での頑張りの評価としては、児童が毎時書く学習感想へ教師がコメントを書き、児童にフィードバックすることにした。作文が完成した時の頑張りの評価としては、第8時に、グループで作文を発表し、自己評価と他者評価を行うこととした。また、作文を6年生に読んでもらう際、6年生にコメントを書いてもらい、それを3年生にフィードバックすることとした。

(3)授業の実際

まず、単元全体の流れを以下に示す。

第1時（調べ方を知る）

米について実際に資料を使い、「できる食べ物」と「作り方」を調べる活動を班で行った。その後、教科書のモデル文で調べたことを文章にすることを確認し、単元の流れを確認した。本時の活動のねらいは、今後行う調べる活動を一度やってみることで、児童が今後どのようなことをするのかを知るとともに、調べ方をつかむことができるようにすることだ。また、調べる際には、班で調べることにし、

なかなか調べることが難しい児童も調べ方を知る機会にできるように配慮した。

第2時（書き方を知る）

説明文の書き方や書く内容を確認し、段落の付け方や書く順番の決め方を考える活動を行った。本時の活動のねらいは、児童が書き方を体験的に学ぶことだ。そのため、第1時で調べた米からできる食べ物（12種類）をおいしく食べる工夫ごとにグループ分けをする活動をし、その一つ一つが段落になることを確認した。また、自分たちが筆者だったら、どの順番でおいしく食べる工夫を書いていくか班ごとに考え、書く順番はどう決めるかを考えた。本時学んだ説明文の書き方を「ワザ」とし、次回以降、確認しやすいようにした。

第3時～第5時（調べる）

博士として自分が調べる食材を決め、その食材について自分が知っていることと知らないことを明らかにし、調べたいことを明らかにした。その後、資料から調べ表にまとめていった。第5時では、読んだ人が分かりやすいを意識し、調べて分からなかった言葉を自分の言葉で表にまとめるようにした。本時の活動のねらいは、読む人意識することで、資料を書き写すだけでは伝わりにくいことを自覚し、分からない言葉は調べようと児童に気付かせることだ。そのため、書き写した文章では難しくて分かりにくいということを確認し、辞書や教師作成の意味の表を活用するようにした。

第6～7時（書く）

調べた中から、6年生に伝えたい食べ物ベスト3を選び、どの順番で書くか構成を考えた。その後、短冊の原稿用紙に段落ごとに文章を書いていった。本時の活動のねらいは、習ったことを活用し、構成を考え、読み手を意識した文章を書くことだ。そのため、習った「ワザ」を確認したり、モデル文を活用してどのように書けば良いのか確認をしたりしてから書くようにした。

第8時(伝える)

6つのグループに分かれ、書いた作文を発表する活動を行った。本時の活動のねらいは、自分自身や友達から頑張りを認められることで書いて良かったと思えるようにするためだ。そのため、友達の発表後は友達の作文や発表の良かったところとアドバイスを付箋に書き、自分の発表後は自己評価をするようにした。

次に、意欲面、技術面についてそれぞれ成果を述べる。

①意欲面に関する成果

書くことの意欲面に関しては、児童が書きたいと思えたか、書いて良かったと思えたかに着目し、考察を行う。以下に3人の児童の学習感想を示す。

【A児】

アンケートでは、説明文を書くことは「少しきらい」と回答し、理由は書くことへの自信の無さだった。授業は、真剣に活動に取り組むことができる。積極的な性格ではない。

表3 A児学習感想

第1時	書く勇気が出た。
第2時	「コツ」をつかめた。
第3時	書く準備が完了した。
第4時	魚を調べたらわからない言葉が出てきた。
第5時	子どもの言葉に直して書く準備ができた。
第6時	(中)段落2までいった。明日完成させる。
第7時	清書を書き、友達に明日、発表する。
第8時	全部できてよかったです。
授業後	工夫してがんばった。楽しかった。

上の表の通りA児の学習感想からは、全体的に書く意欲が表れた記述が多い。A児は書くことへの自信の無さがアンケートから分かったが、学習感想では第1時から「書く勇気が出た。」と記述しており、書こうという意欲が見られた。これは、第1時でその後の活動の見通しをもたせたことで、何をどのようにすれば良いのかがつかめたからだと考えられる。またA児は、第3時から第5時の調べる活動の際も、書くことを意識し、徐々に意欲が高まっていることが分かる。これは、調べ

る際にも、読む人を意識することを確認するなど、書くことを意識させたこと、調べる活動からワークシートを用いてスモールステップで進めていったことが要因だと考えられる。

以上より、A児の書こうとする意欲を支えたのは、単元でどのようなことをするのかつかめたこと、最終目標は書くことだと意識できたことだと言える。つまり、単元の見通しを体験的につかんだこと、ワークシートを活用しスモールステップで進めたことが効果的だったと考えられる。

【B児】

アンケートでは、説明文を書くことは「きらい」と回答し、理由は何をどう書いたらいいかわからないからだった。授業では、積極的に発言をすることも多い。作文では、書き出すのに時間がかかることがある。

表4 B児学習感想

第1時	米の工夫について学んでどんな食品に変わっているか調べた。
第2時	たくさんの書き方を初めて知った。
第3時	衝撃的にキャラメルに牛乳を使っていると知った。
第4時	たくさんの工夫をして姿を変えていると知った。まだまだ知らないことがありそう。
第5時	空欄
第6時	参考がたくさんあるから、頑張って完成させたい。
第7時	空欄
第8時	空欄
授業後	発表に詳しく書けた。

上の表の通りB児は、最初は授業でやったことの記述にとどまっている。しかし、第3時、第4時では、「衝撃的」「まだまだ知らないことがありそう。」という記述があり、徐々に活動に意欲的になっていることが分かる。第3時、第4時では、調べることへの意欲だったが、第6時で、書く意欲を示している。第6時で、B児が書くことに意欲をもてた要因は、主に2つあると考える。一つは、それまでに調べることに意欲をもてたことだ。調べる内容に興味をもち意欲的に取り組めたから、それが支えとなり、書く意欲に繋がった

のだと考える。もう一つは、書くことに必要なことを学び、書き方が分かったことだ。第2時で説明文の書く時の「ワザ」を体験的に学んだこと、スモールステップで進めたこと、書く参考としてモデル文を配布したことなどが効果的だったと考えられる。B児の学習感想にも「たくさんの方の書き方を初めて知った。」「参考がたくさんあるから、頑張って完成させたい。」とある。

【C児】

アンケートでは、説明文を書くこと「少し好き」と回答し、理由は調べることを書くことが好きだからだった。しかし、書く際にはどうやって書けばいいかは困ると記述があった。授業では、真面目に積極的に活動に取り組む。取り掛かりも早く書く力もある。

表5 C児学習感想

第1時	今日は「すがたをかえる〇〇」を書く流れをつかめました。なのでよかったです。
第2時	今日は「ワザ」を考えました。だんだん難しくなってきたので頑張りたいです。
第3時	今日は調べる準備をしました。いろいろ調べられてよかったです。
第4時	今日は本を使って調べました。頑張り度が増えてきたのでよかったです。
第5時	今日は調べたことを自分の言葉に直すことをしました。自分の言葉に直すことが難しかったけど調べたらできたのでよかったです。
第6時	今日は中の文章を書きました。読む人に伝わるように頑張っておいたので伝わってほしいです。
第7時	空欄
第8時	上手に発表できました。
授業後	工夫したところは、段落を付けたところです。

上の表の通りC児は、アンケートでも説明的な作文が好きだと回答しており、学習感想からは毎時間意欲的だということが分かる。しかし、第6時で記述に変化がみられる。それまでは、その時間の活動に対する感想だったのが、第6時では「伝わってほしい。」と願いが記述してあり、意欲の高まりが感じられる。これは、相手意識をもったことで、満足にとどまらない意欲が生まれたのだと考え

る。伝える相手を他学年の6年生にし、相手意識をもちやすくしたこと、調べる時から読み手を意識するよう確認したことが効果的だったと言える。

以上、3人の児童の学習感想を提示したが、他の児童も同様な傾向があり、学習感想からは、多くの児童が書くことに意欲をもつことができていたことが分かった。3人の児童以外の児童のエピソードを以下に記述する。

【エピソード①】

授業の中で調べている際、児童から「辞書を使っても良いですか。」という発言があった。この児童は、普段から活動に積極的な児童だが、この児童の行動が他の児童にも影響し、辞書を使って調べる児童が多くなった。そこで、次の授業では分からない言葉は辞書を使って調べるといいということを全体で共有した。すると、普段なかなか積極的にでない児童も、漢字の読み方を聞いてきたり、言葉の意味を聞いてきたりした。これは、「分かりやすく伝えたい」「そのために知りたい」という思いの高まりによるものだと考える。自分自身が食べ物博士になって6年生に調べたことを伝えるという場の設定により、目的意識や相手意識がはっきりしたことが要因の一つとして考えられる。

【エピソード②】

作文を書いている際、児童から「先生、この文章を書くときと変じゃない？関係ない気がするんだけど。」や「博士の作文だから最後に『とうもろこしのへんしんより』って書きたい。」という発言が出てきた。前者の児童は普段から活動に積極的な児童だ。後者の児童は、自分の考えをもつことはできるが、作文を書く時にはなかなか積極的になれない児童だ。普段から積極的な児童もそうでない児童も、自分なりの表現をしたいと思うことができた。これは、「分かりやすく伝えたい」「そのために上手く書きたい」という思いの高まりによるものだと考える。エピソード

ード①と同様に、相手意識をもって書けたことが要因の一つだと考えられる。また、自分なりの表現に行く前の、基本的な書き方をつかみ、その段階でつまづくことがなかったということも要因の一つと考えられ、書き方を学ぶ授業やワークシートの活用の効果だと考えられる。

【エピソード③】

授業中に「6年生に上手って思ってもらいたい。」という発言が児童から出てきた。また、学習感想にも「6年生に上手いと思ってもらいたいから頑張る。」「6年生に上手だと言われたい。」と書く児童もいた。児童たちにとって6年生に読んでもらうことが、特別なことで嬉しいことだということが分かる。クラスの友達ではなく、6年生を相手としたことで、児童の相手意識は高まり、より上手く書きたいという意欲が高まった。

②技術面に関する成果

技術面に関しては、構成に関する技術と表現に着目する。構成に関する技術については、書き方に関するワザ(接続詞、段落)を適切に使うことができたか、表現については、自分なりの表現を工夫することができたかに着目し考察する。

まず、構成に関する技術について述べる。接続詞は全員が「まず」「次に」「さらに」などを順番に気をつけて書くことができていた。これは、説明文を書く時の「ワザ」として単元の中で繰り返し確認してきたこと、文章を書く時に短冊になった原稿用紙を使い、内容ごとに書かせたことで段落を意識させたことの効果であると考えられる。

段落についてはほとんどの児童が内容のまとまりごとに正しく空けることができていた。7人の児童が段落を正しく空けることができていなかったが、その中でも6人の児童は段落を必要以上に細かく分け過ぎてしまったり、マスは空けたが行を変えていなかったりした児童だ。この6人の児童に関しては、段落を

内容のまとまりごとに分けようという意識はあると考えられる。また、段落を空けることができなかった児童も、「はじめ」「中」「終わり」のまとまりごとには段落を空けることができていた。まだ、細かく内容のまとまりごとに段落を分けることは難しいようだが、大きなまとまりでは分けることができていた。これは、段落の分け方を、ただ教えるのではなく、第2時の活動のように、体験的に児童が学ぶようにしたことや、「ワザ」として単元の中で繰り返し確認してきたことの効果だと考える。一例として前に示したA児の作文を示す。



図1 A児の作文①



図2 A児の作文②

次に、児童の表現について述べる。児童には教師作成のモデル文を配布したり、教科書のモデル文を黒板に掲示したりしたが、自分なりの表現ができている児童も多かった。その中には、「知っていますか。」「みなさんも調

べてみてください。」など読む人を意識した表現をしている児童もいた。また、資料から調べたことを自分なりに言い変えている児童も多かった。資料の内容自体が難しく、調べたことを自分の言葉で表現することは難しいようだったが、分からない言葉は調べ、分かる言葉に自分なりに言いかえることは多くの児童ができていた。このように、表現を工夫する児童がいたことは、読み手がいること、つまり相手意識を児童がもてたからだと考える。作文を書く上で相手意識を児童自身もつことは重要だと言える。一例として前に示したB児の作文を示す。



図3 B児の作文

(4) 全体考察

児童の学習感想や授業中の様子より、本実践の手立ては、苦手意識の緩和や楽しんで書くという点においては効果があったと言える。児童の意欲はどの手立てによって高められたかは、児童によってそれぞれだったが、全体の傾向として以下のようなことが言える。

まず、調べる意欲がその後の活動の意欲の土台となるということが分かった。児童の学習感想を見ると、どの児童もまず自分が知りたいという気持ちがあり、調べていくうちにそれを伝えたいという気持ちに変わっている。書く活動だけでなく、その前後の活動をいかに工夫していくかも重要ということだ。次に、調べる意欲を書く意欲に繋げるためには、教師の手立ての工夫が必要ということが分かっ

た。今回は、伝える相手がいると意識させたことが効果的だった。そして、書く意欲を持続させるためには、書くための技術を児童自身がつかむことが重要だということが分かった。本実践では書く前に書き方を学ぶこと、ワークシートを活用しスモールステップにすることを手立てとして行ったが、効果的だった。

しかし、実践を通して課題も出てきた。まず、苦手意識に着目した際、個人差のある児童にどう合わせていくかということだ。また、文章にする過程のサポートの一つとして、調べたことを自分の言葉に直すことを行ったが、3年生の段階では、まだ難しかったことだ。難しい言葉を調べ、分かるように書くことまではできたが、自分の言葉に直すまでにはいかなかった。発達段階や実態に則してどのようにサポートしていくか今後探っていきたい。そして、意欲は高めれば何でもいいのかということだ。本実践では児童の意欲を高めることを大切にしたい。しかし、意欲が高まった一方で、授業内容とは離れてしまう意欲は拾えないことがあった。意欲は高めれば良いというものでもなく、単元や授業に沿った意欲を高めることが重要だと分かった。そのためにどのように意欲を捉え、どのように高めていくか今後考えていきたい。

【引用文献】

- 1) 海保 博之(2007) 認知と学習の心理学 知の現場からの学びガイド. 培風館
- 2) 子安 増生(2011) 新訂 発達心理学特論. 放送大学教育振興会
- 3) 文部科学省(2006) 特定の課題に関する調査(国語)調査結果. 国立教育政策研究所
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/index.htm>
- 4) 矢部・島村ら(2007) 児童生徒の国語学習. 全国大学国語教育学会. 全国大学国語教育学会発表要旨集 112. 137-140.